

ANIMATION DOLL

REVIEW SPECIAL

**アニメレビュー特殊編
当世人形アニメ講座**

ゴト子ヒ

人形アニメ講座の開始？

今回はしゃべり口調にして、カルチャーセンターで「どうして日本の人形劇、人形アニメはダメになったの？」のような、テキトーな暇つぶしを提供したい。プータイシーを連続テレビで放送した『Thunderbolt Fantasy』のレビュー的なもので「プータイシーを持永只仁は観たのか」という、だけなら、すぐに終わった。

結論から言うと、観てなかったと思われる。

人形アニメは昭和と平成に分れ、これは後々触れる人形劇もそう。

資料として『NHK連続人形劇のすべて』、いい仕事をする池田憲章さんと伊藤秀明の編著である。今回、これを頼りに、少し人形劇を含んだ、人形アニメの話をしないと、包括的な話ではできないのである。これに加えて川本喜八郎『チェコ手紙&チェコ日記』と『チェコ・アニメーションの世界』の書評のようで、書評ではない話をする。

そのため、ただ、だらだらダベっているように聞こえる（読める）かもしれない。

話す方も聞く方も、力を入れて話したり、耳を尖らせて聴いたり、しなくていい。

今の大学の講義なんて、みんな学生が私語をしている。私語をしなくても、バイト潰けで疲れて寝ている。労働力の質なんてしれたものだ。これでは外国人労働者に職を奪われる。遠くは人形アニメが海外勢にリードを奪われる事に繋がる。

かつて立体アニメとは、ほぼ人形アニメのことだった。

3Dモデリングしたキャラクターが、コンピュータ上の三次元空間で演技を見せるのが立体アニメであるのが、一般化した。余計な事を書けば、現在テレビコマーシャルで古川タクがCGも混ざった広告アニメを作っているけど、歴史的にはコンピュータ処理したアニメを作ったのは古川さんがパイオニアだから正解。龍角散のCM、パートは違うと思うけど。

だけど、ピクサーなんかは、パペトゥーンだと、言われる。人形アニメの技法が、今の立体アニメにまったく引き継がれていないわけではない。

昭和の人形アニメ、平成人形アニメが分れているが、人形劇と人形アニメも分れている。

単純に棒遣い、手遣い、糸繰りで操作する、操演系が人形劇となる。これをライブアクションと言う人もいる。「ねほりんぱほりん」は操演系である。影絵アニメにはストップモーションも、操演もある。亜人形アニメになるか。

『サンダーバード』は操演系糸繰りである。

1コマを一回ずつ撮影するストップモーション系、これが人形アニメで、こうしたストップモーションにはクレイアニメーションも含む。「チーズホリデー」。ウォレスとグルミットシリーズが有名だろう。ペンギンには気をつけないといけない。欽ちゃんみたいに「なんで、そうなるの」と問われると、このままだと、日本国内の飼育ペンギンは、近交弱勢でやがて滅ぶ。保護動物の条約を改正しないとまずいだろう。

そして、粘土だけじゃなく、ヘルミーナおばさんの毛糸アニメ、そうチェコアニメが重要となる。

チェコが人形アニメのメッカでウニマがあり、大学に人形劇科がある。おそらく、「ねほりん

ぱほりん」はチェコの絵本「もぐらのクルテク」を元にキャラクターを造形しているだろう。

そんなチェコにはゴーレム伝説があり、皆さんご存知の通り、プラハなどにあるユダヤ人街から伝承が漏れ出して、周辺地域に土着化して、近代になってカレル・チャペックが「ロボット」の戯曲を書いたのは、必然性も感じるだろう。

彼が人形劇をしていたのかはともかく、なんで「皆さんご存知」なのかというと、Wikipedia情報だからである。チェコに関する本を数冊目を通したのに、大手検索サイトに“ゴーレム”とかければ、すぐわかる。ありがたみが無い。それとは別にして、ユダヤ人街はカフカが出身だったりして、チェコ文学では重要である。トルンカの『兵士シュヴェイク』の原作を書いたらしいハシエクはビアホールに通って、同じ建物にあったらしいカフェにいるカフカとはまったく文学交流が無かったとか、そんなことがあったりもする。

ここで変わり種を一つあげると、『ブルーベルベット』で小鳥の遺体を動かして、鳴き声のSEで本当に鳴いているような錯覚をさせる、そんなカットを挿入していると、DVDメニューでちょっと工夫があるところで、スタッフが語っている。

これはデヴィッド・リンチ監督の作風が全て収斂している。後の『ツイン・ピークス』で“世界一美しい死体”を作るのも、なるほどと思う。ありがたい特典映像だ。

バラしたくなかった。

話を戻すと、ストップモーションを主体としても、一部躁演で人形を動かし、「いばら姫またはねむり姫」では姫様が庭番に、姫様が…庭番に…庭番が…なんというか、これ以上は言えないが、「ぶんぶく茶釜」で火の輪くぐりしているのは、ライブアクションじゃないか？ 本物の火で、石鹼に色を塗って作られた炎ではないだろう。岸田今日子原作では日本を舞台としていた。トルンカスタジオで製作するから、中世ヨーロッパに舞台を移している。

さすが遺伝子は嘘をつかない。岸田國士の娘として、話をちゃんと作れる方だ。惜しい人を亡くした。ナレーションにはとりあえず岸田今日子というのが、昭和アニメであった。

近年は人形アニメで

『ムーミン ムーミン谷の夏まつり』

プータイシー（『聖石伝説』等）

『KUBO』

『ぼくの名前はズッキーニ』

『犬ヶ島』

などの海外勢の人形系映画が日本公開されていたり、『Thunderbolt Fantasy』がテレビシリーズとして放送されていたりする。

たいして日本は、短編というか、“電信柱が郵便配達夫に恋をする”という、ストーリーだけ聞いたら不条理三部作な作品が大藤信郎賞を受賞している。エレミはそんなに不条理な話ではない。

今は浮き沈みの沈んでいる時期と思ってしまうえば、慰められる。

おいおい語ると思うが、元に戻ったという事になる。

人形アニメも昭和までなら、かなり作られた。

今回、人形アニメについて、資料をいろいろ漁った。「天満の寅やん」を観たり、マニアックな陶器人形アニメ「のぼら」、教科書にも載る小川未明の原作をセラミックドールアニメーション、陶器人形アニメを英文にただけだが、非持永系統の傑作の一つである。アニメ『宝石の国』を観ないでこんなのを観ていたのかと、「『宝石の国』、プータイシーにすると面白そうだね」とフォローしないといけない。それと書籍にも眼を通しておいた。マンガの『宝石の国』にも眼を通しておいた。五百年後の元ネタは『26世紀青年』らしい。

他は岡本の「おこんじょうるり」とか、NHK（受信料を払おう）「みんなのうた」のバナナの歌ぐらいだ。とはいえ、日本人が一番見たことがある人形アニメは、「どうもくん」だ。

こうして昭和の人形アニメをいろいろ観たが、「ストリート・オブ・クロコダイル」は見損ねている。重要な唯一の国産長編人形アニメ『くるみ割り人形』を、観ていない。正確には、一瞬どこかで観たかもしれない。

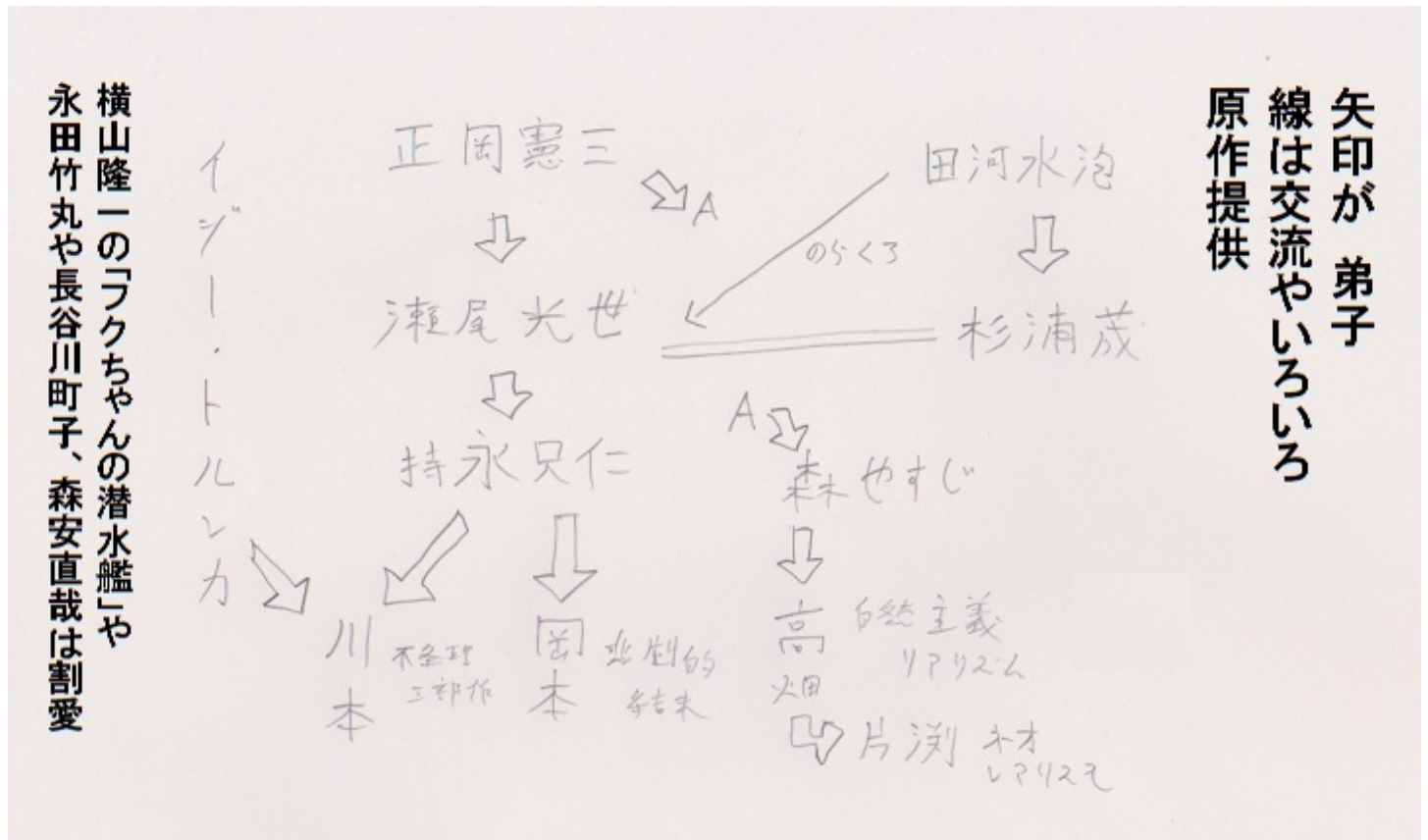
まあいろいろあったのである。

そう、いろいろ過去にはあったのである。

注・『ムーミン谷の夏まつり』はデジタル・リマスター版のようなものが公開で、一度日本で公開されたのか、未公開だったのか、それがわからないが、仕入れた情報によると、ポーランドで作られて、1978～82年頃製作されて、岸の次は泉なのか、小泉今日子がナレーションである。今日子違いなのか？

板書の画像

これは、前提に覚えてもらわないといけないので、あらかじめ板書に書いておく。



人形アニメの持永系統は第二世代筆頭の正岡の正統継承者である。正統カリフ時代のようなものである。

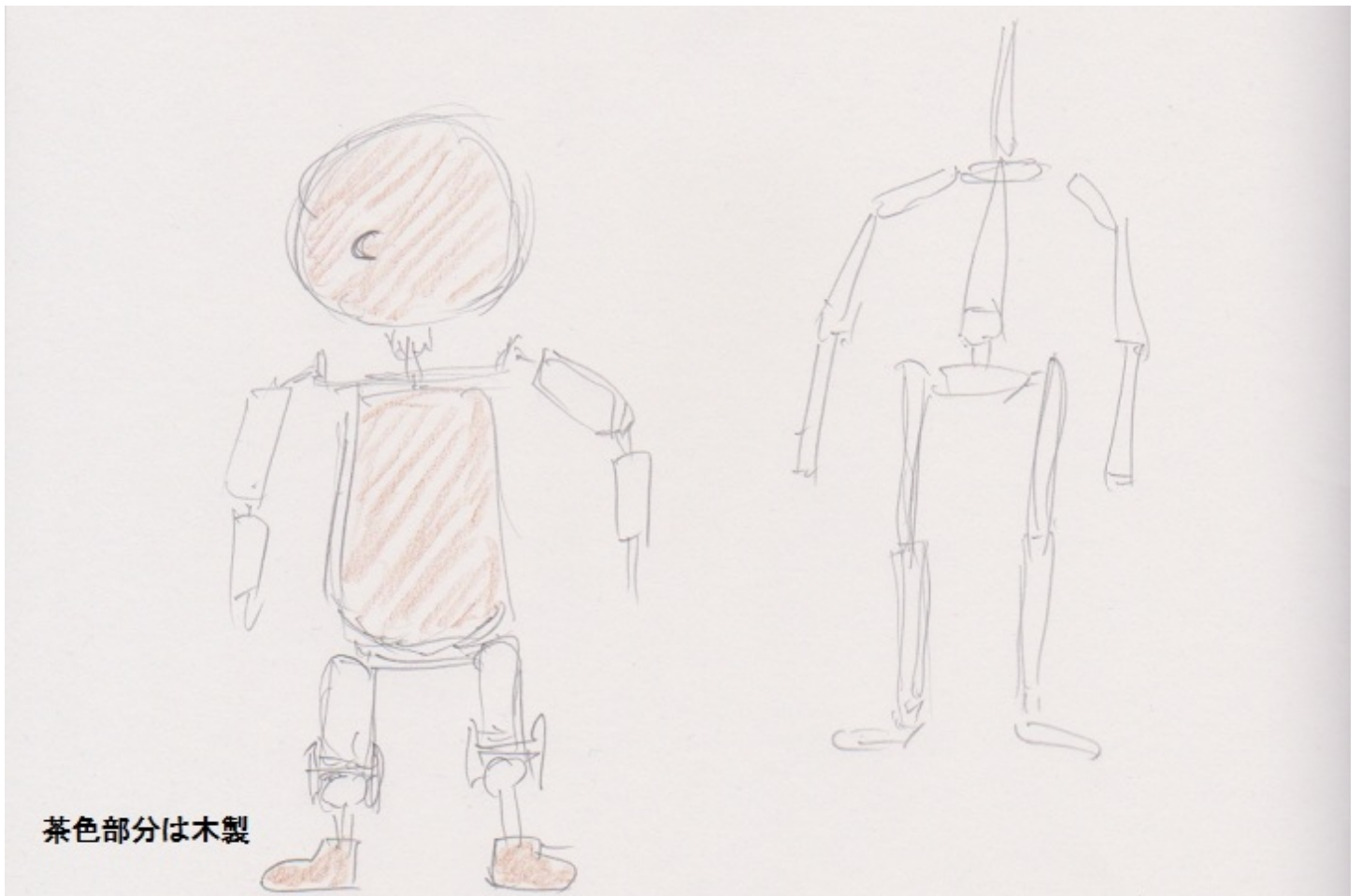
なんでこれ、皆知らないのかというと、マスコミって基本的に左翼系であって、やはり海軍省から資金が出て『桃太郎 海の神兵』を作った瀬尾系統を「無かった歴史」にしたい願望、ちょうど右翼系の「歴史修正主義」の左右反転したものと同じことが言えるのだろうか。彼らのグループはあまり報道されない。

願望的歴史主義で歴史を改竄したりするのは、確かに悪いけど、左翼系のハブやシカトは何故か問題視されない。これもまた、「歴史修正主義」の一種で、国内の人形アニメが顧みられない元凶かもしれない。昭和や20世紀よりも、21世紀になって強化・強固になっている気がしてならない。

似たような事で、おとぎプロの事も、語られない。

コペルくんのような…やめておこう。

次の板書。



左が持永只仁のボールベアリング型。

有名な川本がトルンカのところに留学して、持永人形の内部構造とほとんど同じだったと、皆知っていることだろうから、あえて言うのは、野暮なんだけど。

右は「るすばん」の人形の内部。スマートになっているが、持永・岡本ラインのボールベアリング型人形がここまでき。

人形アニメはこういう、ポーズを止められる内部構造を持っている。

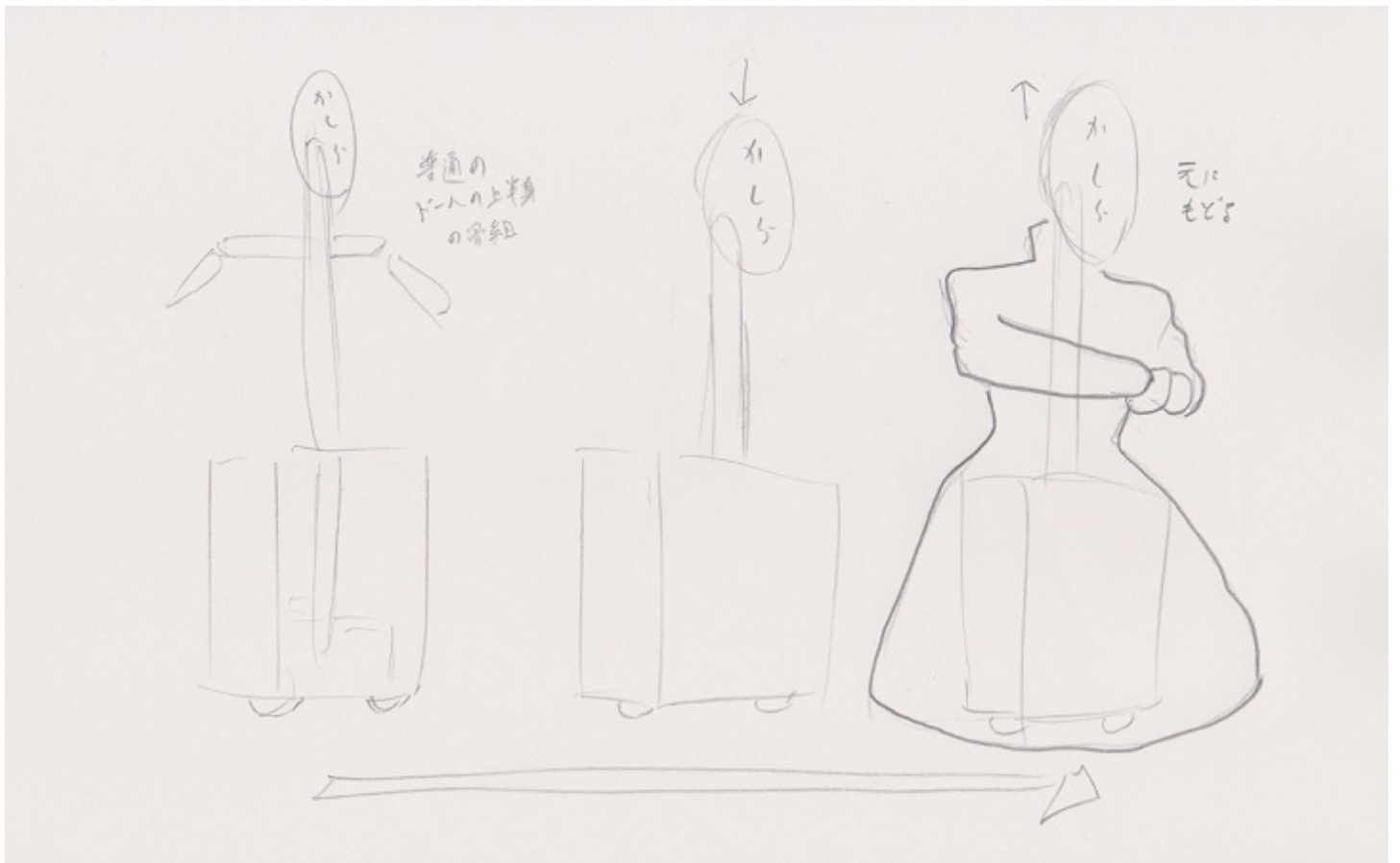
先んじて、これを踏まえさせてから、人形アニメの開祖である持永只仁の話をしなさいといけなと、なんとなく思って、とりあえず板書を書いた。

これらをわざわざ伝えなさいといけな時代になった。

野球で言えば、KKコンビを知らない、松坂の高校野球全国大会での熱投も知らない。21世紀生まれが高校球児なのだから。決勝でのラストストラックアウトのジャイロ・スピン・スライダーの映像は一度くらいは観たことあるだろうけど、生放送で、あるいは夜のニュースで観ていないのである。

サッカーで言えばトルシエ監督の指示を聞かない黄金世代の中盤を擁する代表のせいで、ハーフタイムの控え室でダバディをエキサイトさせている理由も知らない世代が、サッカーをやっている。あんなのやっているから日本サッカーはダメで、進歩していない。

はい、次！

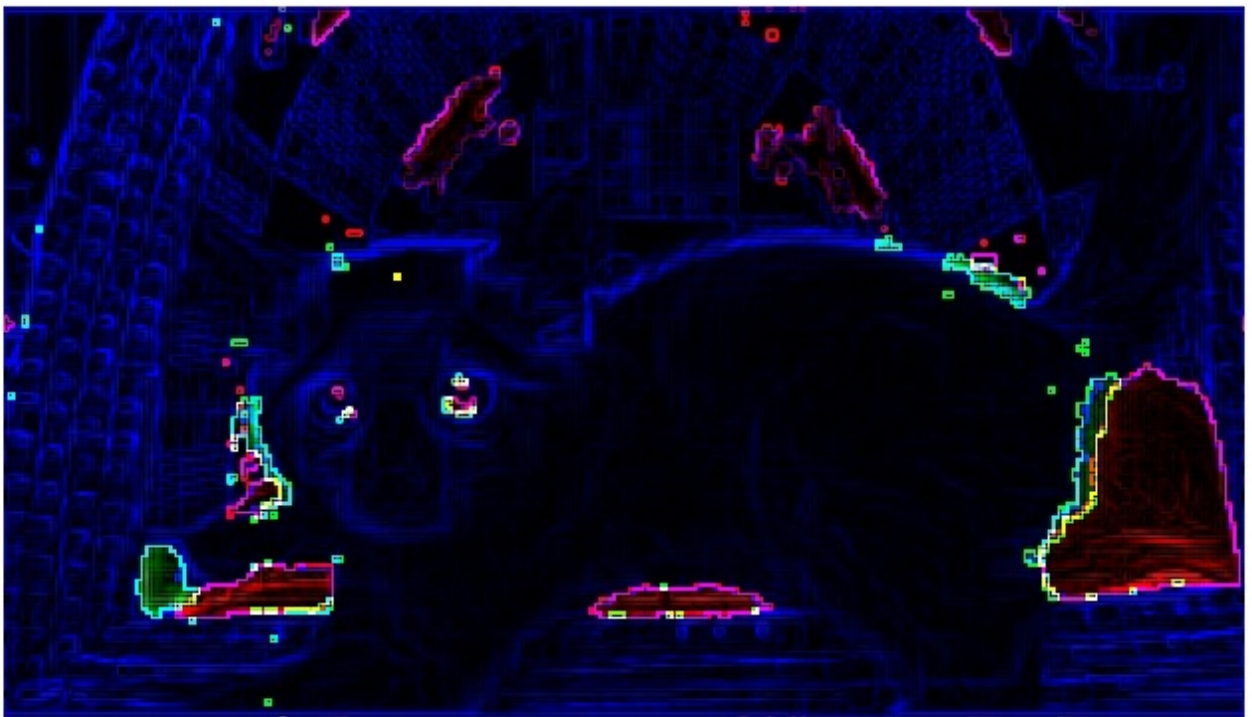


これは歩行機械、歩行機関（機函）と言ったらいいか、『コープス・ブライド』で、作業省略のために開発された。ふいごのような、仕組みではないだろうか。

女性のスカートの中に入れて水平に動かすと、頭部が上下する。上半身のみのバストショットなら男役もできる。

このような機械仕掛けが進歩して『コララインとボタンの魔女』でねずみが宙に浮かぶ、エンディングの最後にあるタネ明かしがある。

「映画秘宝」でヘンリーさんに取材した記事があったが、その時について「カラクリ人形の命脈が脈打つ」という、ボールを投げてみたかった。



NHKの「みんなの歌」放映後、時間調整のための猫動画の静止画で、資料映像は、批評、学習の類の場なら引用しても、著作権の利用範囲なんだけど、「映像の書誌データ」が不足して、そのままはちょっとまずいと。

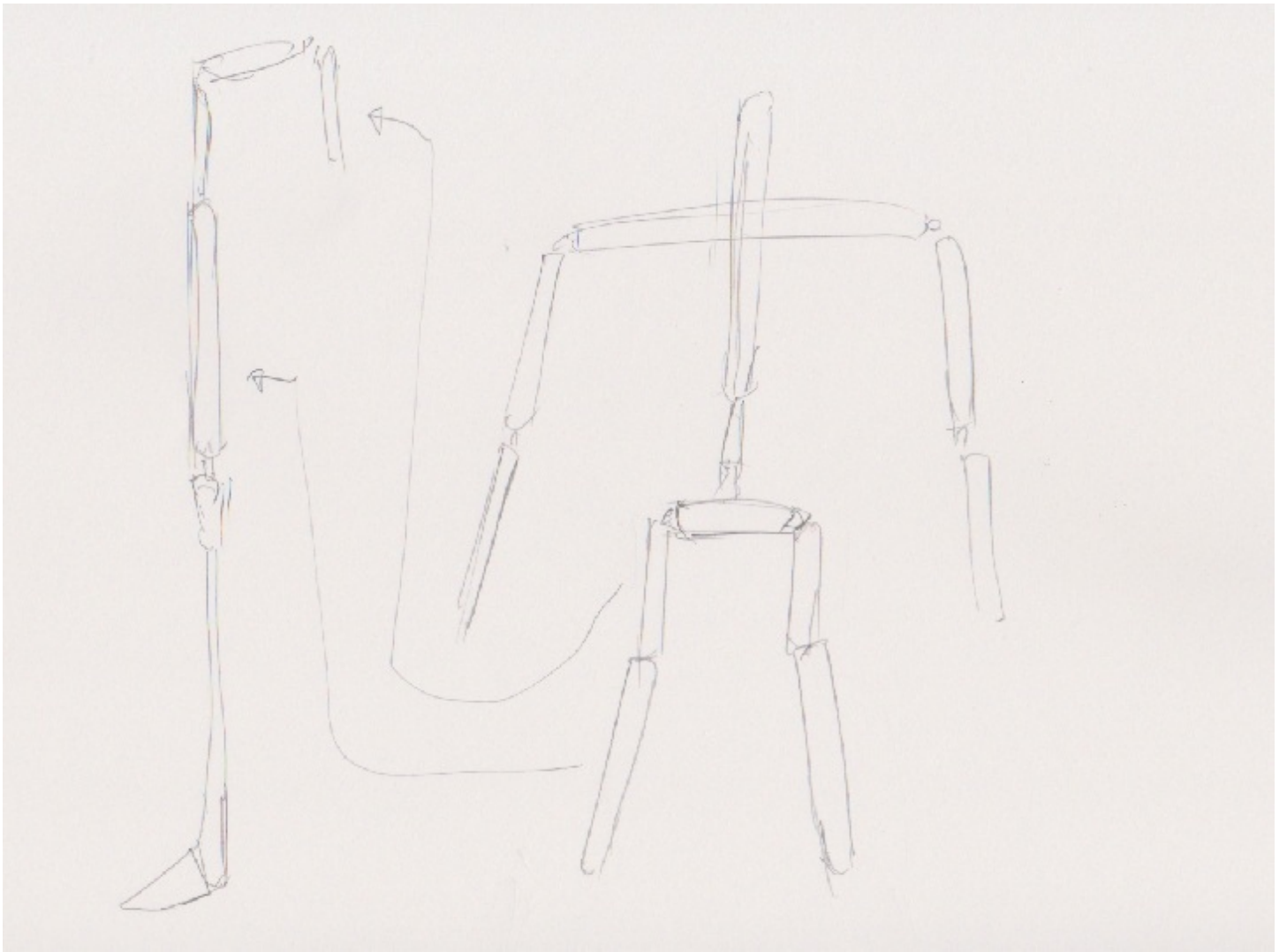
仕方なく、画像ソフトでプレデター処理やモザイク処理に加工。

元の映像は、ボスベイビーも嫉妬する。

黒澤部長も、

「かわいい～ かわいすぎる～」

と、名台詞を言う。



これはちょっとエッチなお人形さんの中身の骨組み。ガイロイドの件で、どうしても触れざるをえなかった。

他の人形アニメ用の人形の骨組みによく似ているが、似ていないところが中心にある。それはガイロイドだから、という至極もったもな理由である。

この板書で一番書きたい事は、次の松田日英子さんの字が出ないみたいに、「ケン」の字がワードソフトに出ない。これが一番伝えたかったこと。「東離ケン遊記」と表記せず、『Thunderbolt Fantasy』シリーズは英文タイトルに統一。

ということで、板書の最後はこれ。

この板書で一番書きたい事は、次の松田日英子さんの字が出ないみたいに、「ケン」の字がワードソフトに出ない。これが一番伝えたかったこと。「東離ケン遊記」と表記せず、『Thunderbolt Fantasy』シリーズは英文タイトルに統一。

東離任劍遊紀

↑
これが表記
で「きをい」

持永と川本の名を忘れるな

持永只仁は『桃太郎 海の神兵』を監督した瀬尾光世の弟子で、エコーの岡本忠成の師匠にあたる、重要なキーパーソンだがマンガにおいて手塚中心史観が強力であるように、アニメの方でも手塚中心史観が支配的で、戦後アニメ史を振り返ったとき触れられることが少ない。

忘れられたではなく、忘れたいのではないか。

さらに高畑宮崎のジブリ陣営まで出てくると、戦中アニメとその周辺は忘れたい過去で、NHK-BS2「アニメ百年史」でもさらっと『海の神兵』に触れられているだけで、製作スタッフが後の日本アニメを支える人物たちがいる事は、触れなくてはいけないはずなのに、あまり触れていない。

持永は器用な方で当時横浜シネマ商会しかもっていなかったマルチプレーンを手作りしたとか、このおかげで『海の神兵』でピンボケが表現できたのか、取材が必要である。

満州で満映なのか、大陸に渡り、終戦後も一時期、中国上海に残留し、中国人になりすまして、人形アニメの指導をしていたという。そうでないと、共産党に捕まりソ連軍へ突き出されラゲリに送られる。中国当局にも何かされるかもしれない。

「心やさしき、なりすまし詐欺」である。冗談はともかく氏の自伝『アニメーション日中交流記』があるので、とりあえずそちらを読んでもらうのが早い。

んで、白竜丸に乗って帰国して戦後の人形アニメは持永の系統と、そこは交流はあるだろうが、非持永系統に大別されるぐらい、持永の人形アニメは国内の主流派であった。

人形劇で言えば、NHKが放送する番組とそれ以外になるような、ことだろうか。NHKの人形劇も細分化される。

わかりやすく竹田人形座（チロリン村）とひとみ座（ひょっこりひょうたん島）の二系統から、辻村ジュサブローの「少年八犬伝」「真田十勇士」、持永の弟子の川本喜八郎の「三国志」「平家物語」があった。

四派があるのは、もちろん、これは昭和までなら、おそらく常識だっただろう。（「人形スペクタクル 平家物語」は平成だが）

最近は大塚幸喜脚本の「新・三銃士」「少年シャーロック・ホームズ」などが、単発的に作られている。

「プリンプリン物語」が抜けたが、昭和までなら川本が孔明の顔を三回作り直したという、逸話は有名であったろう。もともと文楽には、孔明という名の頭（かしら）はあっても、森本レオが声をあてるに足る頭ではなく、作っている。

三回作り直したから、仲達を走らせることができる。人形アニメ、人形劇の真髓がここにある。

死んでいる者（物）が、生きている人を動かしている。生きている人は視聴者だ。死せる人形、生ける者の内心を動かす。

デヴィッド・リンチ監督の作風の一つ、『ツイン・ピークス』の死体も、視聴者の心を動かしているから、世界各国でヒットした。人々を仲達の如くレンタルビデオ店に走らせたのだ。

小鳥の死体を動かすことで、導入となり、主人公がもがれた耳が落ちているのを発見するのも、生身の身体から外された「人形」を見つけたということで、そしてフランクからラブレターをもらう。「最高の人形」の示唆がある。

「アルファベット」の頃から、人形を扱っているが、このあたりに万国性を持つ映像作家のテーマを得たのであろう。何かコツを掴んで、耳はただのマクガフィンじゃない、という事におそらく気づいた。

さあて川本はライブアクションもストップモーション、どちらもできる。ドローイングアニメーションまでできる。さすが二匹のドラゴンを背負っているだけある。

そんな川本には『チェコ手紙&チェコ日記』がある。

これは多摩美術大学の講義用のテキストとして小さく出版されたのを、ちゃんと版元を得て正式に出版された。『何でも見てやろう』の川本版である。

トーク番組でよく、ビートたけしが持ちネタとして披露する、自宅が東京五輪の開発で立ち退き料をたんまりもらえると踏んで、父・菊次郎が借金をこさえたが思惑がはずれ、家の前が道路になって排ガスで家が汚れ放題、立ち退き料はもちろん貰えず、まったくいいことが無かったと面白く話を盛っている鉄板ネタがあるが、その正反対である。

川本の自宅がその五輪開発の予定地となり、立ち退き料をもらえ、国外への最大持ち出し金を手に、チェコへ留学するのは、やはり昭和までなら、皆、知っていただろう。

シルクロードを通っていくのである。

憧れのイジー・トルンカのトルンカスタジオを目指して。

私がトルンカの作品で、絶対にとりあげなくてはいけないのが、『バヤヤ』だ。

トルンカ版『バヤヤ』は元々王子であるバヤヤを貧乏なご家庭の子供にアレンジして、日本では桃太郎ぐらいチェコではポピュラーな童話をアニメ化している。長編であることが特筆だろう。

その原作の内容は、「三つ首竜を倒す」「姫を得る」とだけ抽出すると、何かに似ている。アニメの話だから、プリンセスエスコートストーリー、というと宮崎アニメなんだけど、その宮崎アニメじゃなくて『ドラゴンクエスト』なのである。「バヤヤ王子」をアレンジした後を引いている。

メイキングストーリーをマンガにした『ドラゴンクエストへの道』では伊豆大島で、ドラクエのシナリオというかプロット考え中に姫を助けて終了ではなく、姫を助けた後もストーリーが続くと、堀井雄二は考えた事になっているわけだが、意外にもドラクエの元ネタ、モチーフのひとつではないのか、ドラゴンを倒した後も話が続く。精神の物質化現象（アイテム化）の“おうじょのあい”（や“しんじるころ”）の起源がりんごではないか。母馬に言われて調べると宝箱が出るのも“ロトのよろい”的、探索ゲームの元ネタではないか。だとしたら“ゆきのふ”はプロデューサー千田幸信の事なのだが、トルンカでもある。

ドラクエIIが『バヤヤ』の主演バヤヤをちゃんと元の話通りに王子に戻して、王子が主人公になって、王の面前で闘技場での戦いがあるのも、ここからきている。さらにドラクエIVでは性移項して王女アリーナで、そもそも名前も会場をアリーナと呼ぶ。

トルンカの弟子の川本は、歌舞伎「娘道成寺」を人形アニメにした「道成寺」がドラゴラムの元ネタと考えると、妥当なので、別件の神竜チキが緑の髪なのも、ここから由来するかは知らない。

昭和までのネタは、だいたいわかるらしい。関係ないかもしれないが、データベース量が昭和までなら少なく、ヤマをあてられる。堀井雄二に直接、本当のことを訊いても、「バ・ヤ・ヤ」と答えるだろう。

赤塚マンガのネタは泉麻人さんの著作に拠ると、テレビでやっている「三ばか大将」が元ネタだと、指摘しているので、リアルタイムで同時代人だとわかるらしい。赤塚本人はマルクス三兄弟からデカパンと自己申告しているので、同時代作品の影響は資料を追っていくよりも、同時代人の方が思い出せる分、アドバンテージがある。

ところが平成になると、昭和作品の同時代性を体感せず、資料で見るしかない。本人に確かめるしかない。

そういう状況になる。

『サムライフラメンコ』は『キックアス』が元ネタとは言わなくてもわかる。こういうフェイクヒーローが本物のヒーローになるのは、『ゼブラマン』の方が先と言い出すと、ややこしくなる。同時代人でないと、このややこしい話を信じてしまうかもしれない。

人形の怖さ、『怪奇大作戦』の「青い血の女」を観て新房監督が人形が怖かったから、『コゼットの肖像』で人形の怖さを表現したと語っている。こういう風に製作者自ら語っているのは、アニメでも珍しい。

これ以上はやらないが、『バヤヤ』の道化が鳥山明を経由するとドラクエⅧのドルマゲスになり、馬が化身であるのも、指摘しておかなくてはいけないだろうが、ドラクエⅧはやったことがないので、よくわからない。

「かなしいなあ」

現在、『バヤヤ』はニコニコ動画で観れるのは、国内では著作権切れだからなのだが、観てみると閲覧数はアップから一年ほどの経過で3ケタで、人形アニメはもう、ひまつぶしにもならない。

話がズレちゃったかもしれないが、持永や川本を忘れるとは、こういうことではないか？ もしかしたら、平成までなら庵野秀明監督が板野一郎と宮崎駿の下、アニメーター修行をして巨匠たちから得たものがあると知られているが、もう知っていない世代が出てくる。忘れられる。黒ラベルで暢気にビールを飲んでいる場合ではない。（CM放送中じゃなくなったら何の事を言っているか、わからないだろう）

わざわざ多ジャンルの話題もして忘れ去られるということは、こういうことだと、伝えざるをえない。

幻の企画「項羽と劉邦」

巨匠たちが亡くなって、国内の人形アニメの灯火が消えたかのような、印象を私はもっていたが、『NHK連続人形劇のすべて』を読むと、そうじゃない。

人形劇だが、例示しておかなければいけないのが「項羽と劉邦」で、川本のこの企画ですら流れている。主役級の人形まで作られていた。川本を特集した別冊「太陽」では脇役の顔の作り方まで、明かしている。せんだみつおや石橋蓮司が声をあてるかまでは、わからない。

しかし、平成大不況がわかりやすい理由となるか、『スーラジ』（インド版巨人の星）が日本で放送されない事情など、広告代理店が製作につく、瀬戸際でつかないの問題がある。あるいは日中関係の悪化が水面下であつたらう共同制作推進の妨げになったのか、要因はいくらか想像できる。

はっきり言って、人形アニメ、人形劇はカネにならないと、思われている。

モノクロアトムが放送がはじまる頃、川本がトルンカスタジオへ行った『チェコ日記』を読むと、帰国後に製作しようとしている自分の企画が必ずうまくいくとは限らず、自主制作しなくては行けないと、その予定を立てている。現状とさほどかわらない。構想だけが残されている。

終戦後も、上海に残って映画撮影の仕事を、中国人と偽ってしていた持永なのだが、彼がもし福建省辺りで人形劇をしている人たちに指導してプータイシーが生まれたならば、日本すごい話として語られるが、それはないだろう。

戦中アニメーターは「アニメージュ」みたいな左系のマスコミでは、まるで無かったかのような扱いを受ける。事実、高畑勲の『セロ弾きゴーシュ』が主要な賞の受賞として、大藤信郎賞が漏れている。

アニメージュ大賞……もういない。

持永は80年代になって、やっと中国に渡って当時のことをいろいろ偲ぶ事ができる。WOWOWでドキュメンタリーも放送されて、動画配信サービスに加入するより、WOWOWに加入してシティボーイズのライブもあるし、ドキュメントWを観て、高畑の「かぐや姫を作る」も観れる。どうでもいいことをついでに言うと、WOWOWはそんなに『新世紀エヴァンゲリオン』が好きか。

持永の日中の架け橋を、弟子たちが引き継ぐのである。しかし、それも途絶えてしまいそうなのか、この部分はあいまいな表現に止めたいのだが、NHKスペシャル「世紀を越えて」であれだけ中国が台頭すると、煽って煽って煽りまくったNHKだから、中国との共同制作に何かあつたと勘繰りたくなる。別にNHKが「項羽と劉邦」が放送すると決定していたわけではなく、『NHK連続人形劇のすべて』で期待される新作として「項羽と劉邦」が紹介されている。

川本とは別のラインの弟子、岡本忠成には、人形アニメ版『明日にかける橋』と言える「虹にむかって」は、互いに争っていた村と村の間に橋をかける話である。（これも『飛礫』という中沢厚の本を読まないといけない事が冒頭にある）

妹背山庭訓の吉野川みたいな、そんなところに人形浄瑠璃の大夫よろしく岡本作品では常連のフォーク歌手（及川恒平）が歌を添えて、アーチ橋を建設する。

さすが持永の正統後継である。

アニメージュ大賞……もういない。『アイドルリッシュ・セブン』の悪口じゃない。

このアーチ橋が日中の間にかかるはずが、落とされた。

アニメだけど、淀川長治を泣かした「チョコタン ぼくのおよめさん」も、未来にあるはずの目的地にかかっている「橋」を落とされる話である。大藤信郎や正岡・瀬尾持永を忘れさせようとしているのではないか、気になってしまう。

我々はいつ橋を落とされるか、わからない社会で暮らしている。この間も新潟の西区で、そういう事件があった。もしかしたら、最近では学校で上映もしていないかもしれない。

だから、あの悲劇が起こったとしたら、岡本がせっかく「チョコタン」を作った意味が無い。

「三国志」も師匠持永の中国との関わりで、川本の国際性を表す「旅」を見れば、シルクロードを通して帰国した川本は中国を知っており、そんな彼が中心だからこそ日中共同制作ができた。

「項羽と劉邦」は「三国志」の後継作として川本人形劇の集大成になるはずだった、と思われる。

観客、消費者の移り変わりも触れないと、いけない。

富野監督が『映像の原則』で、だいたい同じ記述だと思うが、「昔はアニメは子供のものであった。今はアニメはオタクのもの」と、語っている。

出版時から改訂を経て、時間が経った今現在と将来・未来に目を向けると「アニメは中国市場の消費者のものになりつつある」と、言っておくべきである。大きく三層で、子供層とオタク層に新興として中国層。母数はゼロになることはないが、パーセンテージは大きく変動する。

国内一万人がビデオソフトを買うか、海外百万人の有料動画配信会員から、「印税」のようなものを分配されるか、それはお菓子やおもちゃの宣伝と同じビジネスなのである。企業イメージがよくなるとして、人形劇も扱われた時代があり、製作資金も出ていた。それは「ねほりんぱほりん」のEテレも、放送局のイメージを損なわないために、前科者や麻薬常習者やNHK離脱者の石澤典夫を動物人形に置き換える。（石澤さんは前科者や麻薬常習者と同列なのか）

ちょっと前に言われたことであるが、今もパチンコやパチスロの台になるアニメがあるが、パチンカーのためにアニメを作り、確変演出を意図的に挿入するのは、悪く無い事だ。マネーショットのあり方が変化しただけ。

ペーターが山羊の母乳を飛ばして口に入れて飲むのは、カルピスが飲みたくなるマネーショットである。これらを悪いとしてしまうと、商業主義全てが悪いと言っているようなもので、よくない。

大きなおともだちという表現があるが、正直、アニメはオタクのものを作りすぎて、近交弱勢のペンギンを作り出してしまった。生命力が弱く、内臓疾患で成鳥に育ちきれない。品種改良を進めすぎ、純血種でないと売れない愛玩動物というか、「純血交配を繰り返して個体数が減って細ってくる」、このたとえはどのジャンルでも起こる。

中国のおともだちのため、つまり大川博のスローガンである「東洋のディズニーを作る」が、正しかっただけである。

つまり、元に戻っただけ。

変な脱亜主義や白豪主義が毒になっているため、「英語を学びなさい」と富野監督も言っているが、ベルリくんは中国大陸を目指す。だったら「中国の言語をひとつ覚えろよ」と言わないのか。和漢洋じゃないけど、中国シナ大陸の文化を学んで、ちゃんと批判的であり、尚且つ範となるものも見定めないといけない。

とはいえ台湾のおともだちが作ってくれたものが『Thunderbolt Fantasy』だから、持永の思想的なものは、受け継がれている。仮に持永がプータイシーの起源的なことに関わっていなくても、いいのである。

少しプータイシーにアリバイ的に触れれば、操演系の人形劇は東洋系の衣服であると、広いすそがあることで、所作が見栄えする。ジャケットのような筒状のスゾだと、なかなか見栄えがせず帽子をとって胸にあてる等のストップモーションの演技が発展するのは、衣装的問題であるのではと、問題提起できる。

これで、西洋と東洋の差が出るのではなく、古代ローマ・ギリシャの衣装であれば、人形劇であっても画が持つと思われる。大航海時代以後であれば、日本の着物を着ていても、貧民でなければ実はおかしくない。

リンセツアがタバコを吸うのは、プータイシーならライブアクションでこんなことができる、驚け、みたいなことではなく、広いすそで見栄を切る、見栄えよくする画作りとは違う、演出の幅の広さを感じる。

(ここで、「すそなだけに幅が広い」とか言うのはよして話を戻そう)

それから商業主義を否定したら、高畑勲のように寡作になる。

21世紀になると、作品数が限られて、後発組に質・量ともに抜かれる。それが京都アニメーションであることは、言わずもがなである。

これは、気遣って誰も言わなかったから、ネコに鈴をつける真似になるか、「高畑勲が優れていて、そのフォロワーでリアリズム表現のアニメの継承者として京都アニメーションがすごい」ではない。

もう生前から、京都アニメーションがすごいから、高畑勲が偉大になっている。雑誌が先駆者として追悼特集をどんなにしても、富野監督がガンダムの芝居には高畑の影響があると発言しても、後発に抜かれたファーストペンギンである。そこをはっきり書かない高畑の追悼記事を読んで、楽しいか？ (ここは音声レコーディングなら「オフレコにして」と言う)

50億円で一本作るよりも、10億円で五本映画を作っていた方が、あたりはずれがあっても、よかったはずだ。

戦中のアニメーターみたいに悪いと思われたら、それは仕方ない。

これ以上、歴史主義に拘泥するのは、よくないだろう。

ほろにが君だって、アサヒビールのコーポレートキャラクターとして、長らく昭和では、おなじみだったはずだ。スポンサーがいたから、可能で、クレオパトラ的女王様が飲みすぎてゲエしたのがロゼッタストーンの解読でわかっている。という豆知識もえられる。だけど、ほろにが君のことを思い出す人は今、少ないだろう。

現在は不条理三部作しか作れない状態にある。

もしかしたら、表現としての人形アニメ、人形劇は、今、もっともできる、それしかできない状況なのかもしれない。

『ポプテピピック』でフェルトで作った人形アニメがあるのも、笑いが表現になっている、妥協というよりも、バランスがいい。悪い「みんなの歌」だけど。「バナナの歌」を悪くしたような、「がんばってないぞ」という深夜アニメなんか観てる人にちょっと毒を吐いている。

むりやりつなげると、日本人形アニメは頑張ってた、ということはない。頑張っていなかったのではなく、注目されることが少ないのだ。

「死者の書」には多摩美の学生たちが製作のアシスタントをしているというが、彼らが「カーネーション」や「ひよっこ」のオープニングを作っていたら慰められるが、そういう情報を私は、得ていない。（実際にそうじゃない）

人形アニメは日本では冬の時代である。

死者とは人形アニメになりつつある。

そして海外勢が隆盛となる

『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』を作っていたというヘンリー・セリックが人形アニメ製作のスタジオ・ライカを設立したのか、どうもそうらしい。そこから『コララインとボタンの魔女』を製作して…ちょっと講座を抜け出して、レンタルビデオ店に行ってきたけど、問題が発生してしまった。

とにかく『コラライン』は面白いので、観てほしい。

この次の作品が『KUBO』らしい。

『KUBO』はかつて日本がチェコに憧れ持っていて日本国内で「バヤヤ王子」伝説を人形アニメ化するような、かつての日本人形アニメ黄金期に憧れて、日本民話を習合して人形アニメ化したのでは？

だから製作者が、「これは日本へのラブレッターなんだ」と、「映画秘宝」で語っているのかなど、想像はできる。「ラブレッターっていうのはなあ、実弾のことだああ」と、フランクの物真似（口紅を塗る動作）をしてみたが、どうだろう。

『犬ヶ島』の監督はヴィム・ヘンダース…じゃなくて、ウェス・アンダーソンは黒沢・宮崎に言及しているが、日本人形アニメ黄金期については触れていない。コム口つくみみたいな、時代遅れの謎のとりまきには、触れないで、日本の人形アニメは詩的であるという評価である。人形アニメとしての前作が『ファンタスティックMr.FOX』でスタジオライカが製作に関わっているような。

大藤信郎賞をとった、「銀河の魚」（マンガ『SMALL PLANET』のアニメ化だけど絶賛絶版中）と「るすばん」を見比べると「るすばん」は見栄えが悪い。「るすばん」の前年が「銀河の魚」で、どう見ても「るすばん」の方が前だろうと、思ってしまう。

岡本のエコー系の流れにあるのが「るすばん」のはずで、田村しげるは「ガロ」でマンガも描いているたむらしげるである。

本当にどうでもいい話だが、漢字名を平仮名ペンネームに変える「ガロ」内だけで流行ったことがある。たぐちともろをとか、ますむらひろし…別に『魔法使いの嫁』が嫌いとかを表現するわけではないのだが、ますむらが絵コンテをけっこうな回、担当している。それなら『それでも町は廻ってる』で仕事をしてくれよ。シャフトは金がないから、安いギャラで「お願いします」と、稿料が出ない「ガロ」でマンガを寄稿していたのだから文化事業と思って、あきらめなよ。

最後に石黒正数がますむら風のエンドカードを描いて、その件はナシがついているから。

蒸し返さない。

アニメもマンガ原作も『魔法使いの嫁』は面白かったです。

講義・講座らしい脱線のどうでもいい事はよして、デジタル撮影で見栄えをよくするというよりも、持永・トルンカのボールベアリング型人形の限界が、ここまでではないか。

参考にゴジラのアニメ映画を手がけたポリゴン・ピクチュアズのメイキング番組では、一体のCGモデルの関節は1000を越えると、される。人形と桁が二つは違うのだが、当然表現できるこ

とも多くなる。

近所のレンタルビデオ店には置いていない、『きゃんたすてい…『ファンタスティック Mr.FOX』のメイキング本『ウェス・アンダーソンの世界』を読むと、基本的には、持永トルンカ型で、人形を動かしている。大きさを四つ用意して、カメラサイズに合わせている。

それにしても、どうしても、「ピクチャーズ」と発音してしまう。

ともかく、この関節の数だけではない。

人形アニメにCGを取り入れるのも、遅れている。

操演系だけ「ドラムカンナの冒険」で、『KUBO』と同じ事をしている。スタジオ4°Cがコンピュータグラフィックスを担当していた。

歴史的にみて、プータイシーがCGを使うよりも早いのかは、調べたら『聖石伝説』の方が早い、結論は国内ではこちら方面の発展はしていない。どうも海外勢を追いかけているようだ。

ビデオ化もされているが、一話7分間というサイズから、再放送をしにくい事情があるのか、忘れられた作品になりつつある。放送する際、次の番組の間をつなぐイージーリスニングな曲がかかり、子犬子猫が戯れる時間調整の映像を流さないといけない。現在の猫動画のオリジンで、そっちの方が視聴率が高そうである。

人形のライブアクションとCGの技術を使った映像は「ドラムカンナ」以後、日本では作られず、プータイシーとの差がどんどん開いていくのである。

人形動画の場合、どうだろう。現在の平面アニメの話題を援用すると、昔のように嘘をつけない。きちんとパーステクティヴをつけて消失点がある作画をしないと、いけない。そうでないと、車や電車のコンピュータ上で作ったポリゴン構造物が置けない。仮想空間内でのコンポジットに適さない。

だから、背景美術の技術力が上がっていったはずで、人形劇・人形アニメはコンピュータによる処理との兼ね合いで技術が上がっていかなかったと思われる。コンピュータの進歩と共に歩を進められなかった。特に専用の技術が上がらないといけなかった。

特撮の話題をされると痛いところを突かれたと思うが、平成仮面ライダーシリーズの今日の成功は、実写に合う技術の向上があるようである。

コスト面も実験作としてやった作品はあるかもしれないが、長編作品は、皆無である。大規模に資本が投じられた様子はない。

実写映画ではデジタル撮影でコストダウンされているが、人形アニメはその恩恵を受けづらい作業工程で、現在邦画シーンのようにデジタルになったから、たくさん量産されるという事はない。

『シン・ゴジラ』でもアナログの特殊撮影は難しかったので、デジタルに切り替えている撮影現場の現実がある。

『Thunderbolt Fantasy』を観て、人形劇やCGでこんなことができると、多くの方は急に驚く。知っていた人は「日本国内でも、やっていた事はやっていたのに、追いつけなかった」と、歯がゆい思いをしていたのだろうが、それは何人いたのだろう？

そして、シリーズを観ると服飾技術が上がっていて、川本人形を半陳腐化させている。半歩イ

ノーションがある。人形の内部構造を腑分けして確かめたわけではないが、文楽人形にくじらのひげを使っている以上の技術革新があるような、気がする。

気がするではすわりが悪い人は、独自に調査して欲しい。『コープス・ブライト』のメイキングでは、歩行機械がどうのこうのある。

操演系でもCGでエフェクトを入れると、コンピュータ上の作業で楽になったとはいえ、コマずつするのだから、そこは人形アニメと変わらない。そこに人形アニメの技術的なコツ、老舗のタレみたいなものをかけられそうなのだが、「川の流れるはどうしてもドロワーイングアニメーションになる」ように、人形アニメの限界を露呈させるようなことになるかもしれない。

次に人形についての思想的言及は『イノセンス』に尽きる。

何故なら核心を突く事が表現されているからだ。性欲を持った人間へ性奉仕するためには、本物の人間のゴーストのコピーが必要で、慰安アンドロイドのAIによる反応では不満足である。人間の業が描かれる。むしろ、暗い性欲を持っているから人間の証、ゴーストがある。だから、そこにバックドアみたいなものがあく。

川本の「火宅」も、相当なものだが、『イノセンス』の欲望の描き方、解決策として選ばれた「(人形が行う囑託)殺人」も、不条理三部作的だ。

よく考えてみると、優れた人形劇・人形アニメ批評になっている。

これを通過すると潜在的に、人形劇を玩具のようにしてしまった。

このコンピュータを駆使したドロワーイングアニメーションが、結果的にストップモーション・ドールアニメを殺したのだ。ガイロイドの犠牲になったのか？ 川本は「いばら姫またはねむり姫」「平家物語」で子供向けではない表現をしている。つまり川本人形はガイロイドであったのだ。人形アニメを青年化させた川本の不条理三部作の後が続かず、それを押井守が引き継いだのが、『イノセンス』かもしれない。海外の取材先でネタを拾ってくるというのも、川本の「旅」的だ。榎原良子さんが演じる検死官には、実在のモデルがいる。彼女が話した事とまったく同じセリフを言わせているとも。

たしか、「最高の人形は死体」と、竹中直人演じるオルゴールの館の主は語る。

デヴィット・リンチ監督は最高の人形が死体であることを知っていたから、「世界一美しい死体」を映像にできた。小鳥の死体を動かすのも、切り落とされた耳を拾うのも、その習作であった。ただのマクガフィンから、人を動かす決定的な存在にする。

だからバトーが動き、人形に罪を肩代わりさせた真犯人を叱責する。

デカルトへの言及も、ある。死んだ娘を象った人形を旅先まで連れ出す。たしかに館の主の疑問通り「人形でなかったら旅先まで連れて行っただろうか？」というの、わかる。

今の日本人形アニメは、デカルトの娘を象った人形になっていないか。それも、海外の映画祭には、持っていけないような、死蔵されるだけの人形になってしまうか。むしろ、人形アニメだからこそ、海外に向けられると、考えるべきだろう。

さらに操演系の「ドラムカンナの冒険」でも、CGを組み合わせた人形劇の後が続かない。

これは、海外勢が隆盛になって、当然である。

ただ、人形アニメ・人形劇が輸入に頼る時代になったのは、元に戻っただけ、かもしれない。

そして、なんでも日本が一番でないと、気がすまない人がいる。

では、その人は国内の人形アニメに、年間いくらお金を使いましたか？　なんて野暮なことを訊いても仕方ない。ノルシュテインみたいに、映像作家を目指す若者に説教するようなものだ。

「火宅」を観たのか？

川本の記念館に行ったか？

そもそも文楽を観劇したことがあるか。

パペットアニメーションのことを知っているのか。

「わいが天満のとらやんや」と、フレーズを真似したのか。

ほとんどの人たちは、そんなことはない。

「あなたたちが何もしていないから、国際的なトップランナーに脱落しました」というだけで、たいしたことはない。

それはどのジャンルでも、これから起きる。

あんまり煽ることをしちゃいけないけど、今起きてる。

真っ先に人形アニメで起っただけ。国産の新作も、『ちえりとチェリー』は公開されている。だが、テレビアニメからアニメ映画になった作品と比べると、話題性は無い。

近年、『コララインとボタンの魔女』の魔女空間とイヌカレーの映像の比較もされていない。ボタンの魔女と、ある魔女は似ている。正岡や大藤の影絵アニメについても、政治的に言及されていない。

『チェコ日記』にある、ニコンのカメラに憧れを持っていて、どうしても川本に触らせてほしいと、いろいろ世話を焼こうとするチェコ人青年がいなくなった未来に我々は生きている。「旅」では、それが戯画化されて表現されているが、私たちはもう海外からそんな風に魅力的に映ってはいないだろう。もう仲達を走らせることは、できなくなった。

川本さんは彼を良く思っていなかったが、ウェス・アンダーソンがこのカメラ小僧の子孫なら慰められるが、具体的に話すのは黒沢・宮崎である。

正直、それは悲しい。

眉間に皺が寄る。

「手」で実際の人間の手が出てくるのは、川本の影響では？　それはトルンカスタジオとの技法の違いがあり、一度人形を手で動かして、右や左の位置関係を確認してフィルム撮影してからコマ撮りをする。マンガで言えばネームを切って「アタリをとる」みたいな、ライブアクション的な技法をとる（現在のアニメではビデオコンテだろうか）。この手法を見たトルンカが手を登場をさせる人形アニメを作ってみようとアイデアを思い浮かべるのは、自然な流れではないか。

だから、「手」は川本の撮影だ。

東京オリンピック開催による開発のために、ほんの少しの幸運があっただけで、こんな風に東欧と交流が出来て、作品を作れた。

本来、自分の人形アニメの製作費用にあてがわれる資金で、海外の地に赴く。「留学費用」と

して海外渡航して人形アニメをわざわざ学びに行く。現在では、結果が出たら後乗りで評価されるだろうが、留学は周りからすすめられない、止められるだろう。日本人形アニメの青春期の出来事として、トルンカスタジオへの留学記は輝くような思い出であるのは歴史上、否定できない。

だが、過去の栄光にすがってはいけないという、警句も発せねばならない。

少しだけ光明があるとすれば、アニメーションではなく、ゲームシーンにある。桜井政博さんのゲームでの3Dモデリングされたキャラクターは、手でフィギュアをいじってスタッフに指示する。

著作を読む限り、イジー川本路線を彼がゲームシーンの場で、人形作家達への手法、そして敬意を引き継いでいるわけではなく、偶然の一致である。「手」における登場人物の手の継承ではないのだが、ゲーム内でもマスターハンド、クレイジーハンドとして「手」（桜井さんの手の敵キャラクター化）が出てくる。いずれ海外から桜井さんの伝統工芸を引き継ぐ才能がやってくるだろう。（日本では大学でルドロジーを学べず、大学院でのルドロジーは20年の遅れを取り戻すプランは示されていない）

こうして作られた『大乱闘！スマッシュブラザーズ』を糸井重里は「お人形あそび」と呼んだ。人形アニメの延長はアニメーションから、CGアニメの分野に近いゲームに乗り換えられ、それはすでに『ドラゴンクエスト』から始まっていたが、『バヤヤ』の影響を見ている人は、少ない。

川本のドラゴンクエスト、川本喜八郎という、二匹のドラゴンを背負った男のクエストは、もう終わったのである。

感傷的かもしれないが、もう世界に誇れる人形アニメを作れなくなったけど、持永や川本、岡本らに「おやすみなさい、私のお父さんたち」と、唐突に言うおこう。

これで終わりにしたいと思う。

アニメレビュー特殊編 当世人形アニメ講座

<http://p.booklog.jp/book/122601>

著者：ゴトチヒ（文責・五島千尋）これを書かないとキンドル本に記事を流用する時、面倒。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochihi1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122601>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト

「グリーンブック」

随筆Uが読める！

兄になりたかった人で寺田ヒロオがわかったような気がする！

ガンバレ！ピンポンフォロワーで卓球少年マンガの討ち死にを悲しむ！

実は「リベルティーナたちの命懸けの飛翔」は完成していたりする

amazon



だいたい300円（特価セールがあるかもしれないから）



ちえりとチェリー
観る機会があったら見て下さい

ANIMATION DOLL

REVIEW SPECIAL

ニマケニエト一卦起齋
出世人ニマケト齋

ニマケ